

令和4年度第1回多治見市総合教育会議 議事録

(要点筆記)

日 時：令和4年11月2日（水）午後3時00分 ～ 午後5時15分

場 所：多治見市役所駅北庁舎4階大ホール

出席者：【会議構成員】

多治見市長	古川雅典
教育長	渡辺哲郎
教育委員（職務代理者）	加藤智章
教育委員	大嶽和好
教育委員	木下貴子

【事務局】

《教育委員会》

高橋副教育長、林教育次長、杉村教育総務課長、久野教育研究所長、大竹食育推進課長、勝見教育委員会事務局課長（放課後児童健全育成調整担当）、矢野教育推進課主幹、山田課長代理（教育推進課）、小久保課長代理（教育総務課）、長谷部課長代理（教育総務課）、吉川課長代理（教育相談室）、渡辺課長代理（食育推進課）、南谷総括主査（教育推進課）、野村主査（教育総務課）

《市長部局》

松尾総括主査（企画防災課）

《校長会》

安藤校長会長（北陵中学校長）

1 市長挨拶

今月から新しく鈴木教育委員を迎えた。多治見市の教育委員会では、教育委員からしっかりと意見をいただいている。多治見市は進化しており、昨日、駅南の再開発の竣工式を終えた。駅南のペDESTリアンデッキから南北自由通路、新本庁舎、駅北庁舎2階部分へ水平移動できるようになる。

現在、12月議会の補正予算の関係を検討しているが、電気代やガス代上がっており、当初予算の2倍くらいになっている。学校関係では、職員室や図書室等にも冷暖房完備しており、快適に使用してもらうために、確実に補正予算を組んでいく。笠原の義務教育学校については、名称や校章、校歌についても地域と協議して進めている。また、防災の拠点にもする方針である。小学校で基礎体力、基礎学力を身につけ、中学校でさらにそれを伸ばし、将来的には地元に戻ってきてもらうようになると良い。終戦後、教育の中立性が重要になり、教育委員会制度ができた。最近では、首長に権限を戻すような社会の動きも感じられるが、多治見市の教育委員会ではきちんと議論をしていただきたい。現場の教職員が働きやすい環境を作っていきたいと思う。

2 教育委員長挨拶

総合教育会議は、平成 27 年に法定化され、市長の権限が教育に及ぶようになったが、多治見市は、常に市長と教育委員会が連携してやってきている。市長と教育委員で話ができる機会はとても大切である。今年度もコロナ渦にあったが、運動会、修学旅行等がスケジュール通りに実施できた。本日の議題について、活発な議論をお願いしたい。

3 議題

教育基本計画の見直しについて（南谷総括主査説明）

【加藤委員】

先ほど市長も言われたが、子どもが大人になって、また多治見に戻ってくるような内容が盛り込めないか。

【南谷総括主査】

事業の施策の中に加えるように考えていきたい。

【木下委員】

目指す子ども像の中に、明確に「挑戦」という言葉を入れてもらえて良かった。失敗が怖くて挑戦できないと、そこで止まってしまうので、何かあっても立ち直れる力を身につけられることが大事だと思う。今後は、多様性も大事になるので、それぞれが違うことを前提にして関わっていくことができるようになると良いと思う。

【南谷総括主査】

事務局でも、多様性が大事だという認識である。多様な子どもたちがいるので、ひとりひとりを支えていくということを考えていく。さらにご意見をいただきたい。

【大嶽委員】

「自他」という言葉を「お互い」に変えたのは、わかりやすくなったと思う。「挑戦」という言葉は、先へ向かっていくということを連想できるので、良いかたちで作っていただけたと思う。図でわかりやすく市民に伝えるようにしていただきたい。

【安藤校長会長】

「挑戦」という言葉が印象に残っている。「挑戦力」は、なかなか高まらないので、その部分を育てながら、一歩前に踏み出す力を強くメッセージとして打ち出せたと思う。

【市長】

概ね肯定的な意見をいただいた。市長として申し上げたのは、「誰にでもわかる言

葉を使って欲しい」ということと、「挑戦」という言葉を入れて欲しいということである。「挑戦」は子どもたちだけではなく、大人へのメッセージも入っている。教職員が挑戦ということを率先して行くと、子どもたちへも伝播するのではないか。それから、注釈「変化が激しく予測が・・・」の前に「失敗を恐れない。」の文言を入れたらどうか。また、施策4のウで、「個々の教育的ニーズに応じた支援」の前に「LGBTQをはじめ」の文言を入れたらどうか。

施策1 体力・学力を高める教育・保育の推進について **(久野教育研究所長、大竹食育推進課長説明)**

【加藤委員】

体育の授業を見学したが、子どもたちが楽しく体を動かすことができていると感じた。タブレットを利用することで、体育の授業が変わったと思う。動画を撮影した後で見るというやり方が進歩していると思う。食育については、以前いただいた給食が美味しかった。美味しいということをアピールできたらよいと思う。

【大竹食育推進課長】

給食について、多治見市のホームページや新聞でアピールすることや、イベントの際にアピールしたいと考えている。

【木下委員】

運動と言えるかどうかかわからないが、子どもがフルーツバスケットが楽しかったと言っていた。楽しいことは記憶にも残るので、学習という面でも良いと思う。主体的、対話的学びという言葉聞くが、何か具体的な取り組みはあるか。iPadを使った授業の様子を他の先生にも見てもらおうと参考になると思うが、そのような紹介の場はあるか。デジタルシチズンシップという言葉初めて聞いたが、新しい考え方だと思う。情報モラルと言うと、どちらかというと規制のイメージがあるが、デジタルシチズンシップではそのような印象は少ない。食育について、大人がカップラーメンを食べ続けると気分が沈んでしまったということを聞いたことがある。食べることは体をつくるものであり、メンタルにも影響するのではないかと思うので、そのようなことが子どもたちに伝わると良いと思う。メンタル的に沈んでいるときは、栄養不足かもしれないと思う。かつて自分が子どもの頃に、給食に関するアンケートを答えたときに、アンケートに回答したものを給食で作ってくれたことがあって、とてもうれしかったので、そのようなかたちで、給食に関われると良いのではないかと思う。

【久野教育研究所長】

フルーツバスケットのようなレクリエーションの場は大事である。コロナ禍で不活性的な子どもが増えたと言われており、各学校でレク大会を工夫して取り組んでい

る。体を動かして楽しかったという思いを積み重ねることが大事だと思う。勉強について、これを学んで良かったと思えるような授業ができるとよいと思う。深い学びは、学んだことをこれからどうやって活かしていくか考えていくことなので、次にこれに活かせる、普段の生活でどう活かせるということが見つけられると、ますます勉強が好きになり、授業にこんな意味があると思うことができる。先生がお互いの授業を見ることについては、今年度、研究発表会という機会があり、コロナ禍でできなかった期間もあり、特に若い先生は初めての人もいた。先生がお互いの授業を見る機会はこれからも続けていくべきだと考える。

【大嶽委員】

運動の楽しさについて、特に体育の授業は iPad の活用で、授業の可能性が広がってきていると思う。自分のフォームを見て、うまい子と比べると、できることが増え、確実に楽しさにつながると思う。体育の定番になってきたと感じる。学校で習った運動を家でもできるようになると良いと思う。学力調査結果について、国語は必要な科目であるという認識はあるもののあまり好きではないという結果であるが、なぜそのような結果になっているか、意見や思いを拾い上げていただきたい。基礎教科でもあるし、言葉を使うことや語彙の獲得といった面で波及することも多い。食育について、食べることという楽しさが学校にあるのは大事なことだと思う。給食のメニューや、反応やランキングを発信していただけると良いと思う。

【市長】

体を動かすことについて、いきいき遊びを幼稚園で行ってもらい、最低限の体力をつけていただくことは、効果があると思っている。国語も同様に幼稚園から語彙を豊かにするように、カードのようなもの使ってやっていただくことが効果があるのではないと思うので検討願う。

【安藤校長会長】

I C Tについて、多くの予算をつけてもらってありがたいと思う。職員は最初の頃は戸惑ったが、学習が広がったと思う。I C T推進員も設置していただき、いろいろフォローしていただいている。本来の鉛筆で字を書くことや、実際の本を読むことと端末を使うことのどちらが効果的か、どのくらいの割合にするかの検証をする必要があると思う。食育については、食育センターを見学することにより、目で見ることができ、給食ができる過程や、どのように運ばれてくるかがわかり、子どもたちも勉強になっていると思う。

施策2 社会性と豊かな心を育む教育の推進について（久野教育研究所長説明）

【加藤委員】

心の教育に関して、以前、道徳の授業を見学させていただいたが、寸劇のような

ことをやっていた。相手になりきると、相手の気持ちが良く理解できるので、良い授業だと思った。キャリア教育に関して、地元の経営者やカッコいい大人を見ると、あのようになりたいとか、あこがれや将来の目的になるのではないか。そのような大人は多治見にも大勢いるので、JCと連携するなどして、そのような大人を見せることができると良いと思った。職場体験も実施されているが、少し義務的なところもあるので、もう少し深掘りできると良いと思う。

【木下委員】

キャリア教育に関して、キャリアパスポートを見返したり、連続的なものとして使っていない感じがするので、そのような活用を考えていただきたい。

【久野教育研究所長】

道徳のロールプレイは、相手の心情を考えていくという点で、特に低学年で有効である。自分とは違う考え方を知ること、多様な考え方を体得できる。キャリア教育については、各所と連携して考えていきたい。キャリアパスポートの連続的な活用は大事だと思うので、どのようなものをファイルするのかを良く検討し、自分の歩みを振り返ることができるようなものにしてきたい。

【市長】

資料について、「キャリアパスポート」の文言に注釈をつけていただきたい。キャリアパスポートの機能を iPad に入れることはできないか。キャリアパスポートとは思い出づくりのようなものか。

【久野教育研究所長】

キャリアパスポートの機能を iPad に入れることは可能である。キャリアパスポートは自分を振り返るようなものなので、思い出づくりの要素は強い。

【大嶽委員】

道徳のロールプレイについては、高校でもやっている事例がある。劇団を招いて演技指導もしてもらい、相手になりきって気持ちを味わい、その立場で発言することは有効な手段である。地域との連携については、手間がかかったりすることはあると思うが、具体例としてどのようなものがあるか。

【久野教育研究所長】

作物を育てるために、地域の方を呼んで教えてもらったり、笠原では中学生が保育園に読み聞かせに行っている。

【大嶽委員】

キャリアパスポートについて高校での活用例はあるか。また、朝読書のようなこ

とを過去に行っていたと記憶しているが、現在はどうか。

【久野教育研究所長】

高校での活用は把握していない。朝読書は帯時間を確保することが困難であることや、働き方改革のこともあり、実施しているところは減ってきた。

【大嶽委員】

地域について学ぶことについて、資料やデータを活用する手法があると思うが、例えばドローンを使って地域を見てみるとか、視点を変えていろいろやってみると良いのではないか。

【市長】

キャリア教育に関して、教職員にこれ以上の負担を求められないので、ロータリークラブ等をお願いして、社会人の生の声を聞くのが良いのではないか。ドローンに関して言えば、精華学園では、ドローン専門の課程があるので、そこに頼んでみるとか、近くに適切な人がいることがあるので、うまく活用できると良い。社会性を育むには、教職員に頼るだけではなく、幅広く人を活用していくことも必要だと考える。

【安藤校長会長】

キャリア教育に関して、自分が何が得意なのかを小さい頃から知っていくということがキャリアパスポートだと思っている。読書については、読書こそ対話的で主体的で深い学びだと思う。中学生になるとスマホやゲームに押されて読書量が減る傾向があるので、その割合を意図的に減らしてあげる作業が必要だと考える。

【市長】

朝の会を利用して、週に1冊本を読もうというようなことは難しいかもしれないが、運動や読書を家庭でも保護者と一緒にやってもらうことも大切だと思うので、教育委員会、校長会も含め検討していただきたい。

施策3 家庭、学校・園、地域の連携の推進（林教育次長説明）

【加藤委員】

まちづくり市民会議に関して、情報交換も大事だが、対戦というか、大会というか、そのような行事を行うのもおもしろいと思う。学校運営協議会に関して、運営に生徒が入っているケースもあるようで、興味深い。ジュニアクラブに関して教職員や保護者の負担も重いので、専門業者をお願いして、教職員や保護者の負担を減らすことができないか。

【林教育次長】

まちづくり市民会議に関して、大会ということで、例えば、百人一首大会や主張大会が挙げられ、子どもが参加できるようなことを企画してもらっている。子どもをどう参加させるか、その延長で子どもスタッフというものがあるが、子どもスタッフを設けることが目的ではない。ジュニアクラブの活動については、専門業者にお願いする方向性もあるが、どうしても費用の面で、保護者の負担等の課題があり、検討委員会で模索している。

【木下委員】

まちづくり市民会議の中心メンバーはどのようなであり、どんな活動を考えていただいていて、子どももスタッフとの関わりはどのようなになっているか。

【林教育次長】

まちづくり市民会議は、各地域から青少年育成委員を募り、委員が集まってまちづくり市民会議を構成している。地元の大人が集まって子どもを育てるために何ができるか考えている。市からの補助金もあり、例えば活動として、もちつき大会とかマスつかみ大会のように子どもに楽しいイベントを開催しており、またそれらの活動に関わることで活躍の場もつくる、そのような活動である。

【大嶽委員】

学校運営協議会に関して、例えば昭和小の学校運営協議会の基本的な姿勢は、学校支援である。ジュニアクラブに関して、中体連の参加はどうようになるのか。

【矢野主幹】

中体連の大会にジュニアクラブの参加を認めるどうかについては、現在ガイドラインを作成中であり、来年度の大会については、今年度末に方向性を出す予定である。

【安藤校長会長】

ジュニアクラブは多治見では20年前から実施しており、他の自治体に比べ進んでいる。ただし、スポーツ格差の問題が言われていて、経済的、時間的にゆとりがある家庭の子どもは参加できるが、そうでないと参加できないという2極化の問題がある。本校でもクラブ加入率は30%なので、これ以上下がらないように、どのように食い止めるかの問題がある。また、指導者については、現在、志の高いボランティアの方にやってもらっているのが現状だが、この人たちが高齢化してきており、引退した時に、次にどうするかシステムを早く構築する必要がある。

【市長】

今のジュニアクラブの指導者の高齢化の問題については、文化スポーツ課にしっ

かり伝える、若い指導者が入ってくるようにしたい。

施策４ 多様な課題に応じた支援の推進（林教育次長、勝見課長説明）

【市長】

医療的ケア児への対応については、令和５年度から精華小で実施する。そのために看護師も設置する。不登校という言葉については、文部科学省が「学びの場は多様である」と捉えるのであれば、フリースクールなどを含め言葉の定義について整理が必要と考える。最終的には、本人も保護者も学校に戻ってきたいと思っているはずである。

【安藤校長会長】

不登校の子どもは多くて、コロナの影響もあるが、本校では１０％に達しそうである。不登校の子どもたちのために、環境を整えており、相談室も広くして、またギガスクールが進んだことで、オンラインで相談室でも教室の授業が受けられるし、家でも同様である。ただ、この状況が良いとは思っておらず、最終的に教室に戻るきっかけにしたい。成果が上がれば他の学校に対しても提案できると考える。

【大嶽委員】

不登校の問題は、新聞でも大きく取り上げられており、その数が多いと認識している。勉強、学力のことと不登校についての関係はどのようなか。

【林教育次長】

学校では授業の時間が大半なので、授業がわからないと、その時間が長くなり、それが毎日繰り返されると学校に行くのも嫌になることも否めないのも、十分にケアする必要がある。例えば数学は積み上げていく学習なので、一部抜けると積みあがらないし、とはいえ、通常の授業で、わからないところまで戻って学習するのは難しい。学習のことが負担になって不登校になることを低減していきたい。

【市長】

そのことに対応するための具体的な方策はあるか。

【林教育次長】

退職された校長にサポート支援員として入ってもらう予定である。

【木下委員】

授業がわからないと学校に行きたくないと思うし、中学になると勉強が難しくなると思うし、ＩＣＴ等を活用して、習熟度にあわせて勉強できるようになると良いと思う。わからない子も授業中に何か１つでもわかれば、学校に行きたくなくなるかも

しれない。学びの多様性に関して、以前は絶対学校に行かないといけないというような風潮があったかもしれないが、今は、行かなくてもいいことを認めてもらえたらありがたい。学習権の保証というか、多様な学びの場を与えてもらえるのはうれしい。最終的には学校に行きたいと思っている人には行けることができるような支援をお願いしたい。

【加藤委員】

福井県の事例で、祖父母が多くて核家族が少ないことで、サポートされていると聞いた。多治見も長寿会のメンバーが多いので、何か連携できないか。定年の先生がサポート支援員としてやってくださるのはありがたい。学校に行きたくない子どもでも何か将来の目標があれば、授業のひとつくらいわからなくてもいいやと思って学校に来られると思うので、早く自分の目標を見つけてあげられれば、授業全部できなくても、学校に来て楽しい場があって、将来の自分が想像できれば、社会に出ても転職することも多くなっているから、学校に来ることを目的に、生きることを目的に、そんな環境ができればと思う。

【市長】

福井県の件も含めて教育委員の皆さんには県外視察も行っていただきたい。

施策5 学びを支える教育環境の充実（林教育次長、杉村教育総務課長説明）

【大嶽委員】

I C T関係は、積極的に進めていただきたい。事務作業も省力化される。幼保小中一貫教育をされていると思うが、高校の授業も見学していただくと良いと思う。

【木下委員】

I C Tでの効率化について、出席確認等がデータでできることが助かると聞いたことがある。現場の先生の業務を簡素化できることがあれば、やっていただきたい。

【加藤委員】

幼保小中一貫教育に関して、笠原は今後小中一貫校ができるが、地域での教育として、NPO まいての存在も大きいと思う。学校だけではなく地域での教育も必要と考える。

【安藤校長会長】

中1ギャップに関して、以前、小6と中1に「小学校から中学校に行くのに何が不安か」のアンケートを行ったが、結果は圧倒的に勉強が不安ということだった。それを踏まえ学習に力を入れていこうと思った。退職校長がサポートしてくださるのはありがたい。現在、教員は、少し人気がない職業だが、ひとつの原因として、

教員に対する理不尽な要求に関する疲弊ということがある。スクールロイヤーの制度等があり、学校現場を大事に考えていただいて、ありがたい。理不尽な要求に対して、うまくさばくというか、仲介するような仕組みがあるとありがたい。

【市長】

市職員に対してもカスタマーハラスメントのようなことがあり、弁護士に依頼して研修を行っている。学校に対してもそのような研修を実施するよう対応していく。クレーマーに対して心を痛めるのは学校の先生であり、親が先生をリスペクトしないと子どももリスペクトしないということもあると思う。本日いただいたご意見は、多岐に渡るため、全てを計画には包含できないかもしれないが、趣旨に添うように修正、完成していきたい。

【市長】

これを持って、令和4年度第1回総合教育会議を閉会する。

以上